氏　　名	西　尾　美　也（ニシ オ ヨシ ナリ）
学 位 の 種 類	博　士　（美　術）
学 位 記 番 号	博　美　第 338 号
学位授与年月日	平成23年 3 月25日
学位論文等題目	〈作品〉Self Select in Nairobi、Overall: Steam Locomotive 〈論文〉状況を内破するコミュニケーション行為としての装いに関する研究
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　日比野　克　彦
（論文第１副査）	〃　〃　（　〃　）　木　幡　和　枝
（作品第１副査）	〃　〃　（　〃　）　た　ほ　りつこ
（副査）	くらしの良品研究所　所　長　小　池　一　子
（　〃　）	青山学院大学　教　授　苅　宿　俊　文

（論文内容の要旨）

私は、自身の装いの経験とそれを通した他者との関係のあり方に対する関心を出発点に、2002年よりコミュニケーションの実践研究を続けている。

近代市民社会では、個人は複数の共同体に属し、複数のアイデンティティを持って生きることが求められる。装いは人付き合いにおいて安心感や信頼感を付与し、コミュニケーションを円滑にする媒体として機能していると同時に、身体を物理的に覆うがゆえに、身を偽ったり役割を演じ分けたりすることを可能にしている。つまり、装いはある種のコミュニケーションを円滑にする一方で、あり得たかもしれない別のコミュニケーションを遮断しているのではないか。私は少年期にこのような実感を抱いたことから、この「壁」としての装いを取り払うことに関心が向かった。この関心が今も尽きていないのは、装いを取り払って文字通り裸になることも、「壁」に新たに装いを与えることも、問題を本質から遠ざけてしまうという魅力的な困難に直面したからである。そして、実践の過程で私は次のような仮説を導くに至った。装いという「壁」に亀裂を生じさせるためには、装いを排除したり覆い隠したりするのではなく、既にある装いの状況に身をしっかりと置き、それを内から食い破ろうとするコミュニケーションの実践にこそ可能性がある。

本論ではまず、状況を内破するコミュニケーション行為の実践に向けて、「ワークショップ」と「芸術」という方法論に着目する。私が行なった初期のプロジェクトには、ワークショップ的性質が内在していた。そのことを確認した上で、近年の多分野におけるワークショップの著しい普及について、教育・学習系ワークショップを参照しながら、その背景と意義、問題点を検討する。また、アートプロジェクトや脱芸術というキーワードに着目して、芸術における作り手と受け手という関係の変容過程を概観し、ワークショップの普及と時代的背景を共有している現在の芸術の動向について考察する。そして、ワークショップと芸術という二つの方法論が、私に具体的なコミュニケーション行為の実践を可能にさせてきたことを確認すると同時に、それぞれの分野内での実践における限界点を明らかにする。

次に、身体を媒介にする表現者や、フィールドワークによって人間理解を探求してきた文化人類学者の実践を参照しながら、分野という壁を超えて日常そのものを創造するための方策を探る。そのために、まず、ハンナ・アレントの「仕事」と「活動」という概念を用いて、「作品」と「活動」の区別を明確にする。すなわち、「仕事（作品）」は、ある程度の耐久性を持つ消費の対象を作る行動であり、人が生き

る世界を制作、管理するものであるのに対して、「活動」は、物の介入なしに直接人と人との間で交わされる唯一の行ないである。続いて、これらの対立する二つの概念が「ワークショップと芸術」と「装い」にそれぞれ対応していることを明らかにする。そして次章で、現状の「装い」の環境を内破する「活動」を通して、装いによって閉ざされていたコミュニケーションを装いそのものによって取り戻すために、私がこれまでに行なってきた諸実践について具体的な記述をする。

ここで取り上げる諸実践は、「言葉」からイメージした「形」を古着で作る《ことばのかたち工房》と、世界各地の巨大な喪失物を古着のパッチワークで再建する《オーバーオール》、数十年前の家族写真を再現制作する《家族の制服》、世界のさまざまな都市で見ず知らずの通行人と衣服を交換する《セルフ・セレクト》である。これら全ての実践に共通するのは、既にいる人と既にある物を用いて、その使い方に変化を与えるという方法が用いられていることである。これら諸実践の具体的記述から、あり得たかもしれない別のコミュニケーションが生成されてゆく様子が明らかとなるだろう。

本論の終盤では、コミュニケーションの新たな実験場を求めて、2009年にケニア共和国ナイロビで私が開始した「ナイロビ・アートプロジェクト」に焦点をあてる。ここでは《セルフ・セレクト・イン・ナイロビ》と《オーバーオール：蒸気機関車》という過去の二つの実践と、現在進行中である「ナイロビレジデンス」について具体的に述べる。そして、グローバル化時代における本実践研究の応用可能性とその意義について記述し、論を閉じる。

（博士論文審査結果の要旨）

西尾美也の博士論文「状況を内破するコミュニケーション行為としての装いに関する研究」における著者独自のキーワードは「内破」と「装い」であろう。いうまでもなく、本研究と西尾の長年の研究と実践において、「装い」は流行や奢侈としてのファッションや服飾の新奇性をあつかうものではない。けだし、「装い」を西尾はdressingと英訳しており、それは無防備な創傷を防護する「包帯」を指す語でもある。

痛み易い無防備な〈中身＝人間〉を覆う〈服＝装い〉は、しかし、個体を防護し守るという保守的、現状維持的な役割を果たすだけでなく、皮膚の代用として外へ向かうメッセージ性ももつ。服飾、装いの研究では主としてこの表皮としての服が〈外＝他者〉に向けて発するメッセージを対象としてきた。わずかに文化人類学などにおいて服飾の精神、意識、認知における意味を探ってきている。西尾はそこに、着る＞意思疎通する＞交換する＞変容する＞自己の深部へ眼差しを向ける、という思考回路を導入することにより、柔軟にして浸透性のある方法論をあらたに試みた。

この点はおおいに評価されるが、加えて、その研究の方法論が彼自身の長年に渡る実践的な制作、ワークショップ、フィールド調査に裏づけられて、ダイナミックな検証過程をへていることが、美術作家の一面を持つ西尾の研究として固有の価値を生み出している。また、文化人類学的な類似の先行研究においては、多くが儀式、しきたり、つまり暗号としての装いを扱っているのに対し、現代の普通人の装いを媒介とする西尾の研究では、ハレよりもケに照準を合わせ、より普遍的な応用の効く知見をものしている。

そして、「内破」という用語である。形式としての衣服ではなく、むしろ心身が分ちがたく関与する「装う」という行為と、そのコミュニケーション性に照準を合わせた西尾の研究、実践、その成果は、制度としての社会と状況よりも、ソフトな内臓、心、脳を運ぶ個体の心身を一体として扱い、あくまでも社会単位の、個人の内側からの変容の可能性を探っている。「社会構成主義的」とも「間主観的」とも言いうるこのアプローチは、社会学などの制度に傾きがちな視点とは峻別されるべきもので、美術分野の博士論文に相応しい価値を付与している。本論文の相当部分を占める西尾自身のアフリカをはじめとする日本内外でのフィールド調査とワークショップの制作ノートとも記録とも言えるものは、この「内破」

の内実を知る上で不可欠なものとなっている。
　以上を総合的に判断し、本論文を博士論文として合格と判断した。

（作品審査結果の要旨）

　ケニアの首都ナイロビにおいて、劣悪な居住環境や経済的貧困、民俗単位の文節などの現代アフリカ地域社会が抱える課題に向き合う活動であり、人間的に生きる創造性に向けて、日常的な個人の装いのコニュミニケーション行為によって状況を内破するアートプロジェクトを提示する２点の作品である。
　〈セルフ・セレクト・イン・ナイロビ〉では、申請者が道行く人に声をかけて説明し、自分と相手が着ている衣服を交換する。多くの人が行き交う通りや街角といった公共空間の各所で６日間にわたりくりひろげられた。フィッティングルームと呼ぶフラフープの輪に現地の伝統的な布であるキコイによる２つの簡易な装置の中で衣服交換するパブリックパフォーマンスである。それぞれの「装い」を取り替える場面に続いて、結果が引き起した周囲の人々のさまざま反応はビデオ映像によって提示され、鮮明に現場の臨場感を伝える。申請者と交換した「装い」の姿は一対の写真が集合した作品としても展示された。
　〈オーバーオール：蒸気機関車〉は、世界各地の巨大な喪失物を市民が協働し古着のパッチワークで再建する試みである。首都ナイロビ誕生の契機となった20世紀初頭にケニアの鉄道上を走行していた蒸気機関車を選びンガラ地区の熱い光と砂埃が舞う屋外で日本から持参したはさみとマジック、ダンボールのガイド、足踏み式ミシン２台で公開制作を開始した。植民地時代からの権力の象徴として正と負の両方の歴史的イメージをもつ蒸気機関車の制作には多くの共感が集まり色とりどりのパッチワークとして完成。ナイロビ最大のスラム街であるキベラ地区において現地の人々が機関車の中に入り線路を行進するパブリックパフォーマンスへと展開された。会場に設置されたプロジェクトの片鱗のような慎ましいパッチワークの椅子で作品を観る者の心の「装い」をも内破する逞しさと暖かさが伝わる作品展示である。学部以来一貫した申請者の研鑽を集約した博士課程の成果に相応しい優秀な作品であると全員の一致をみた。

（総合審査結果の要旨）

　西尾が学部から一貫して続けてきている衣服を素材とした表現活動は、西尾自身が自分の為に行う制作活動から社会的な運動へと移行してきている。それは万人が関係しているコスチュームという生活のアイテムを作品のモチーフとしている点によるところが大きい。よって制作の手段も個人的な仕事からワークショップという大衆を巻き込んでの表現方式に進展してきている。その手段は衣服が社会的にどのような意味を持つのかということを研究していくには必然的に生まれてきたものである。ワークショップを通して自己の制作をしながら、もうひとつこのワークショップというもの自体の役割、意義などの研究をも研究し論じている点はこの論文の価値であると考える。西尾の論文は今後のワークショップを取り入れた活動をしていく者たちにとっても資料として大いに参考になるものである。自身がワークショップの活動しながら同時にワークショップを分析・研究し論文としてまとめていくことは非常に困難なものであるが、西尾はそれに取り組み、充分な成果を上げたことは称賛に値するものである。論をまとめ上げるに於いては、ワークショップの研究者の第一人者である副査の苅宿先生の指導のたまものである。西尾の中で現場と研究という良好な関係が今後も継続して行けるとより、今までにない新たな領域の成立そして、社会的に意義のある研究活動になっていくことであろう。
　作品に於いては､彼のワークショップでの活動の写真･映像を美術館で展示するというものであった。ワークショップの作品としては現場での活動が本来の姿であり、ドキュメントの展示に於いては、その

見せ方は難しいものではある。西尾自身もこのことを自覚しており、活動の記録展示物という位置づけで美術館での作品を扱っている。空間を布の作品で覆うようなことも出来たのではあるが、ワークショップの現場から切り離されてしまうと、布のオブジェ作品と捉えられてしまうと判断し、そのようなインスタレーションは敢えて行わなかったことは理解できる。しかし今後、ワークショップの現場性を復元でなく、体験できる展示方法も考えることが課題である。これは彼に限らず、ワークショップを表現活動としている作家が美術館などで展示を行う際に抱える共通の課題である。

総合的には西尾の作品・論文は優れたものであり、美術の領域の中で新たなフィールドを創造し実践していくであろう。また自身の活動を理論的にも確立していき、美術に限らず広域的に実社会の中で更なる活躍が期待できる。